第 36 回 上越市公文書センター出前展示

『関東大震災から 100 年』

～上越から送られた支援物資～

1923 年(大正 12 年)9 月 1 日 11 時 58 分、神奈川県西部を震源とするマグニチュード 7．9 と推定される巨大地震が発生しました。

死者・行方不明者約 10 万 5 千人、全半潰・焼失・流出・埋没の被害を受けた住家は 37 万棟にのぼりました。関東大震災です。2023 年(令和 5 年)は、近代日本の災害対策の起点となった関東大震災の発生から 100 年の節目の年となります。

今回の展示では、高田での地震のようすや、関東大震災の被害状況、そして、被災地への支援物資がどのように集められ、送られたのか、公文書センターが所蔵する資料を中心に紹介します。

高田は震度 3 を観測～高田測候所の地震計

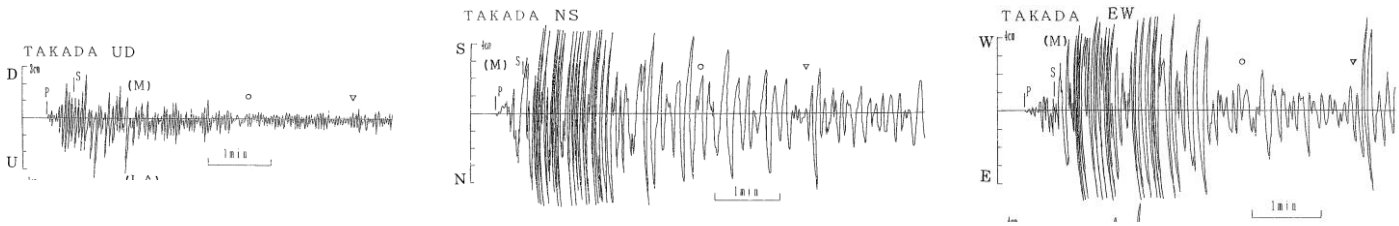
関東大震災は、関東地方の埼玉県、千葉県、東京府(当時)、神奈川県、山梨県で震度 6 を観測したほか、北海道道南から中国・四国地方にかけての広い範囲で震度 5 から震度 1 を観測しています。上越では、当時の高田測候所で「震度 3」を観測しました。

高田測候所は、1921 年(大正 10 年)の 12 月 27 日に開設され、翌年 1 月 10 日から気象観測が開始されました。同年 2 月 10 日には、中村式簡単微動計による地震観測がはじめられ、その翌年の 1923 年(大正 12 年)には、大地震を観測できる今村式二倍強震計が導入されました。そして、9 月 1 日の朝から正式な観測がスタートしました。

まさに観測初日のその朝、関東大震災が起こったのです。高田測候所に設置された地震計の記録紙には、地震の揺れが大きな波形となって記録されています。【資料№1-1、1-2、1-3】

図 1　高田測候所における地震の揺れの記録

上下動の波形(資料№1-1)　　南北方向の動きの波形(資料№1-2)　　東西方向の動きの波形(資料№1-3)



(武村雅之・野澤貴「高田測候所で観測された 1923 年関東地震の本震・余震の記録」(『地震』第 2 輯第 49 巻、1996 年)を加工。当論文は記録紙に残された地震の波形を再現し掲載したもの)

関東大震災の被害状況

テレビもない、ラジオもない、ましてやインターネットなど普及していない大正 12 年当時。人々が情報を入手する手段として、新聞がありました。上越でも、9 月 3 日付けの高田日報朝刊は「全市の三分の二は焦土　戒厳令下の東京市」との見出しを掲げ、東京から逃れてきた東京日日(にちにち)新聞の記者の話として「南千住から下谷日本橋方面は一面の火の海と化し深川など全焼してしまつたであらう」などと伝えています。【資料№2-1】

震災発生から２週間後の９月 15 日には、報知新聞編輯局が『大正大震災写真帖』を発行し、被害の甚大さを伝えています。【資料№2-2】　また、情報を入手する他の手段としては「絵葉書」がありました。新聞ほどの速報性はなかったですが、写真で被害状況を伝える安価な媒体として数多く発行されました。【資料№2-3】

被災者支援はじまる～新潟からはまず米～

○政府の動き

大地震の翌日２日、政府は午前９時から内閣臨時閣議を開き、当面の対処方針を決定しました。これにより、被災者の救済に必要な食糧等を、内務大臣が必要に応じて非常徴発(臨時徴収)することが可能となり、早速、９月４日付けで、新潟県に非常徴発令が適用されました。

【資料№3-1：９月７日　高田新聞夕刊】 ➡

本縣と非常徴發

○新潟県の動き

新潟県では、非常徴発令の適用を待つまでもなく、被災者支援物資として米５万石(米の量の単位。１石（こく）は約 150kg)を東京方面へ輸送する目標を立てました。県内の各郡・市への割当てを決め、９月３日午前２時、中頸城郡へ５千石を割当てる指令を発しています。【資料№3-2：９月５日高田日報】

○中頸城郡の動き(なかくびきぐん、郡は当時の行政機構の一組織)

中頸城郡では、割当て５千石のうち、１千２百石は大地主などから提供を受け、残る３千８百石を町村で負担する方針をたて、９月６日午後、町村長会議を開催して、各町村への割当てなどを正式に決定しました。

吉川村大字河沢（こうぞう）からは８石の米

公文書センターが所蔵する資料のひとつに「大正拾弐年九月一日惨事　関東地方大震災事件書綴」があります。当時の新潟県中頸城郡吉川村(現在の上越市吉川区)河沢集落で、関東大震災発生から翌年５月までの震災に関連する出来事や書類を、集落の代表であった区長が記録・整理して綴ったもので、他に類例が少ない貴重な資料です。この資料から、中頸城郡の町村長会議開催後の吉川村や大字河沢集落での災害支援の動きを紹介します。

○吉川村の動き

郡での町村長会議を受け、吉川村では、９月９日午後１時から区長会議を開催し、支援策が話し合われました。特に米の供出については、村への割当て 200 石をさらに大字(集落)ごとに割り振った割当表が配られました。【資料№3-3】

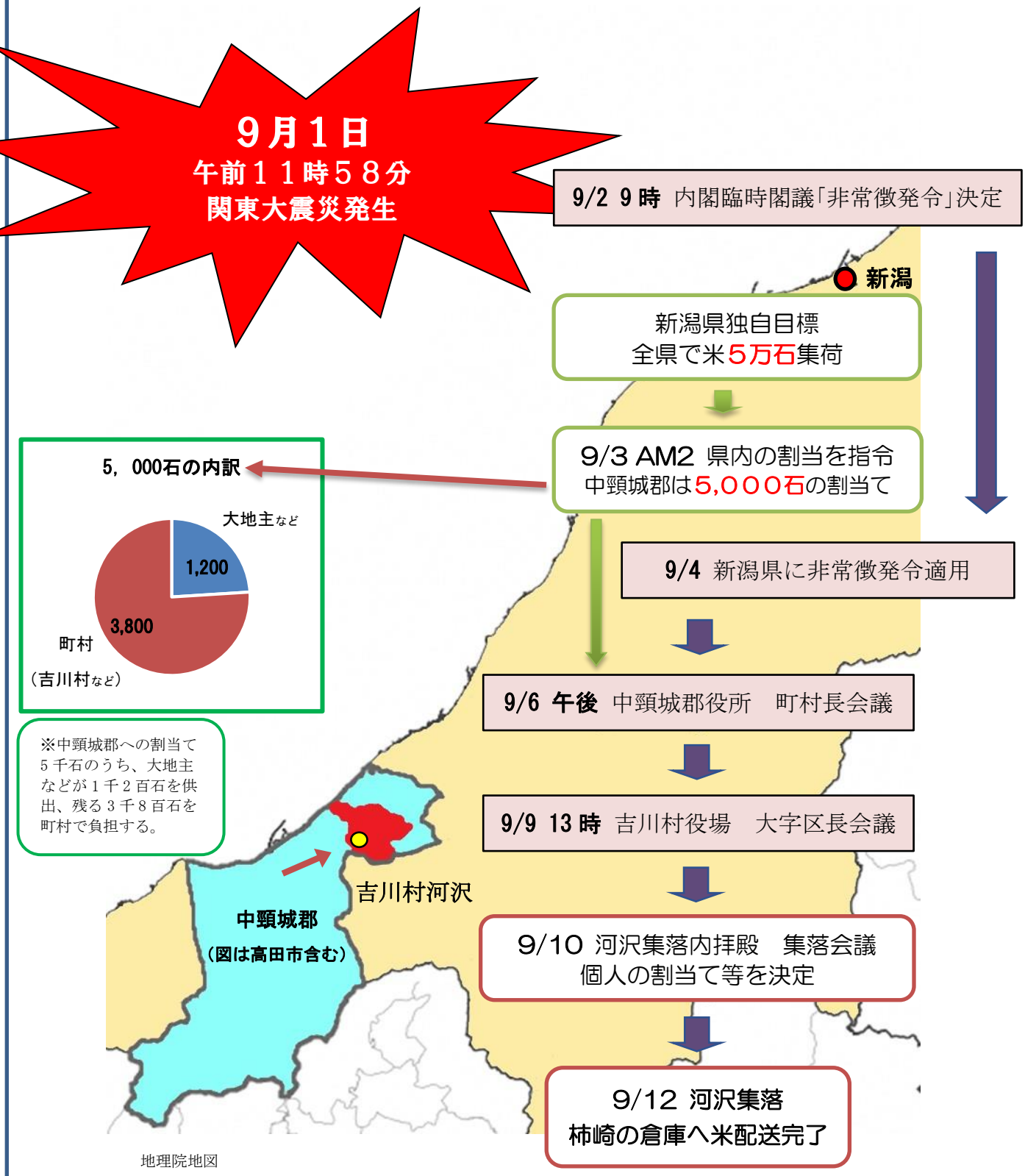
○大字河沢集落の動き～集落内会議の開催～

河沢集落への割当ては８石でした。９月 10 日午前に集会を開催し、割り当てられた８石の各家への割振り、米の集荷や計量方法、集まった米を柿崎倉庫へ運搬することなどについて協議と確認を行いました。　【資料№3-4】

資料に綴られた、米を集荷した際に作成した調書【資料№3-5】や、9月12日に柿崎へ米を届けた際の受領書【資料№3-6】から、短い期間の中で支援物資である米を供出したことがわかります。

このように、各集落から柿崎の倉庫に集められた米は、吉川村分としてまとめられ、鉄道輸送で東京へ送られました。【資料№3-7】

図２　関東大震災発生後の米送付要請のまとめ



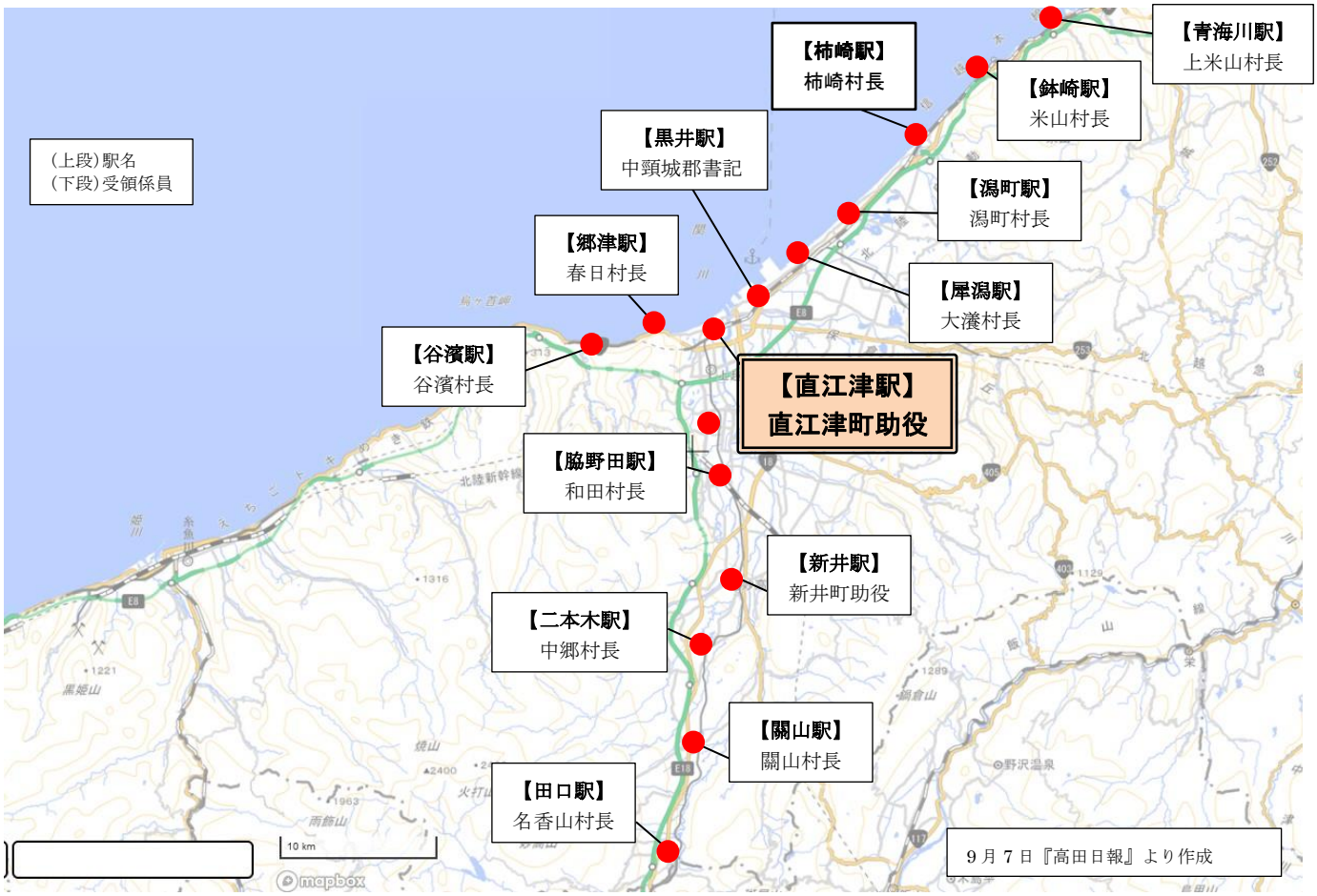
鉄道を利用した支援物資の輸送

吉川村大字河沢のように、県や中頸城郡から割当てがあった米のほか、善意で集まった野菜や味噌、漬物など、上越地域からはさまざまな支援物資が送られました。この際利用されたのは、当時すでに全線開通していた信越本線を利用した鉄道輸送でした。

新潟県では、被災地に県の出張所を設け、県内各地から支援物資を東京方面へ送る際のルールを定めて通知しました。【資料№4-1】

支援物資は、最寄りの鉄道駅(停車場)から送ることとされ、直江津駅は直江津町助役、柿崎駅は柿崎村長、郷津駅は春日村長、黒井駅は中頸城郡書記というように、各町村の長等がそれぞれ最寄り駅の物資受領係員に任命されています。

図 3　罹災救助品(支援物資)最寄停車場に於ける受領係員



直江津駅に集約された近隣の支援物資

直江津駅からは、地元直江津町でまとめられた支援物資のほか、近隣の諏訪村、保倉村、有田村などの支援物資も送られていることが、資料からわかります。

表 1　直江津駅からの発送記録（一部）

発送月日	発送町村	支援物資の内訳
9 月 9 日	直江津町	白米 113 俵、味噌（大樽入）12 個、梅干（斗樽入）3 個
9 月 9 日	諏訪村	精米 14 俵、南瓜（野菜袋入ほか）26 袋、味噌 16 樽、なす 10 樽、慰問袋（袋入、箱入）15 個
9 月 10 日	保倉村	白米 13 俵 2 斗 1 升、味噌（大樽）4 樽、味噌（小樽）7 樽、漬物類 5 個、梅干 3 個、南瓜・馬鈴薯 21 俵
9 月 11 日	有田村	白米 18 俵、馬鈴薯 13 個、味噌 7 樽、梅干 3 樽、南瓜 2 個、漬物 1 樽、衣類 2 包
9 月 11 日	保倉村	衣類 3 包、慰問袋 9 箱
9 月 12 日	有田村	白米 1 俵、馬鈴薯 1 俵
9 月 13 日	**直江津町**	**白米 77 俵、味噌（大樽入）6 個、味噌（中樽入）1 個、鰯（するめ）莚包 3 個、慰問雑貨（箱入）16 個、慰問雑貨（バケツ入）1 個**
9 月 20 日	春日村	雑品（莚包）1 梱、衣類（箱及俵入）15 個
9 月 20 日	有田村	衣類 2 梱（こり）
9 月 20 日	直江津町	白米 85 俵、味噌（中樽入）100 樽、衣類（箱入）6 個、衣類（莚包その他）13 個、食料品（鰯及び若布類・莚包その他）13 梱、雑貨（莚包）7 梱、雑貨（箱入）8 個、書籍（石油箱入）5 個

【資料No.4-2】

※　直江津町歴史公文書「大正十二年　京濱大震災救済書類」により作成。

※　直江津町の内訳には後述の佐渡からの物資も含まれている可能性あり。

佐渡からも直江津駅を経由、東京へ

佐渡郡（現在の佐渡市）からも支援物資が東京方面へ送られましたが、中継地のひとつとなったのが、直江津駅でした。佐渡郡内の各町村でまとめられた支援物資の一部は、小木港へ集められ、海路で直江津港へと運ばれました。そして、直江津駅から、直江津町や近隣町村から集められた支援物資とともに、鉄道貨物として東京方面へ送られました。

表 2　佐渡からの発送記録（一部）

発送月日	発送町村	支援物資の内訳
9 月 9 日	**相川町**	**白米 6 俵、若布（袋入）1 個　【資料No.4-3】**
9 月 11 日	真野村	白米（4 斗俵）35 俵
9 月 12 日	小木町	粳白米 4 斗入 33 俵、鰯 3 個
9 月 12 日	松ヶ崎村	粳白米 4 斗入 8 俵、大根漬斗樽入 2 個
9 月 12 日	羽茂村	俵米 4 斗入 25 俵
9 月 13 日	澤根町	白米 20 俵
9 月 14 日	西三川村	白米 13 俵
9 月 15 日	外海府村	白米 21 俵、干鰯・若布 2 個、若布 6 個
9 月 17 日	赤泊村	白米 29 俵、白木綿（莚包）1 梱

※　直江津町歴史公文書「大正十二年　京濱大震災救済書類」により作成。

※　発送日は支援物資としてまとめられ小木港を出発した日。

送荷案内

種目　数量　備考

白米　六俵

若布　寒壱個

右送荷案内仕ル也

大正十二年九月九日

新潟県救恤品直江津受持係殿

新潟県救恤品輸送取扱嘱託

澤根町長

【資料No.4-3】送荷案内・相川町分
新潟県救恤品直江津受持係あて
新潟県救恤品輸送取扱嘱託澤根町長

支援物資の輸送経路

当時、長岡～高崎間の上越線が開通していなかったため、新潟県から東京方面への輸送は、主に**信越本線の鉄道貨物**が利用されました。

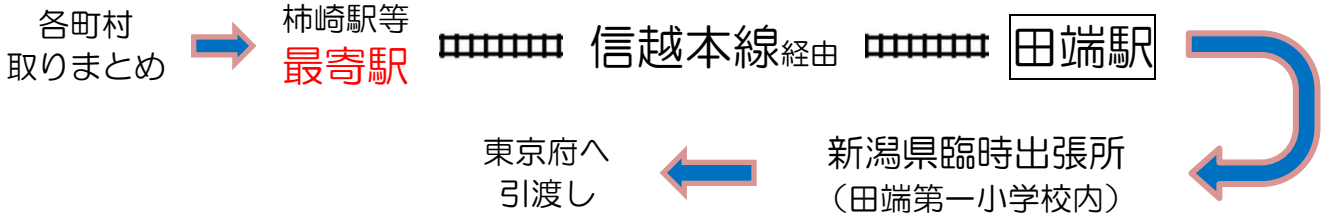
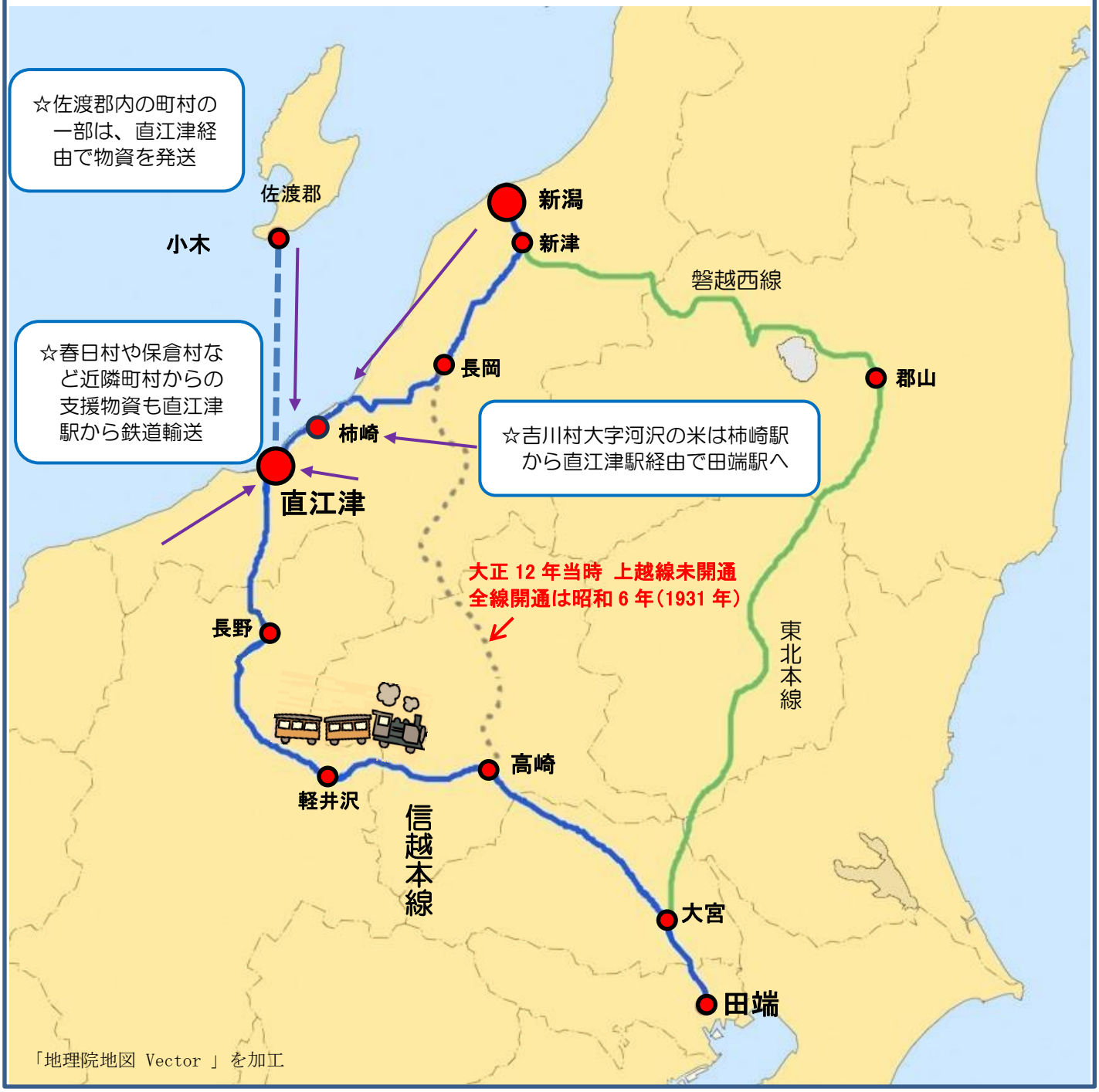



図 4　関東大震災発生（大正 12 年）当時の鉄道等の状況